

〔特別寄稿〕

# 前田惠學先生の仏教思想研究

嘉木揚 凱 朝

## はじめに

このたび、同朋大学仏教文化研究所の設立 40 周年記念シンポジウムにお招きいただいた。筆者の招聘については、故前田惠學先生の御遺言があったとうかがっている。前田先生が亡くなられてはや七回忌も過ぎたが、あらためて先生の学恩と筆者の研究の歩みを述べさせていただきたい。

## 1 前田惠學先生の学恩

### (1) 前田惠學先生の略歴

前田惠學先生は、日本の著名で優れた仏教学者である。1926 年に愛知県名古屋市の真宗大谷派速念寺において前田家の長男として誕生され、後に同寺第 15 代住職になり、2010 年 10 月 31 日に浄土に往生された。

前田先生は、1951 年に東京大学文学部哲学研究科を卒業された。1962 年に『原始仏教聖典の成立史研究』によって東京大学より文学博士の学位（旧制）を授与され、1964 年にこれを出版、その後も数々の出版をなされた。東海学園女子短期大学、名城大学、愛知学院大学の教授を歴任し、カナダのトロント大学にも客員教授として招聘された。

前田先生は原始仏教を専門とされたが、広く仏教学・仏教史の研究の進展にご貢献され、金沢大学暁鳥記念賞（1952 年）、日本印度学仏教学会賞（1959 年）、日本学士院恩賜賞（1966 年）、仏教伝道文化賞功労賞（2005 年）など多くの榮譽ある章を受けられている。特に、日本学士院恩賜賞を受賞したのは 39 歳の時で、今日でも人文系研究者の最年少記録として更新されていない。

前田先生は海外に研究出張することが多々あり、欧米・旧ソ連からアジア諸地域に至るまで見て回られ、とりわけ、スリランカ、モンゴル、中国、ベトナム、韓国、台湾などに何度

も訪問された。初めて「ユーロブuddiズム」を紹介され、各地の仏教についての卓越した識見をお持ちであった。特にさかのぼる時代の仏教のみならず、現代仏教を重視されるご姿勢とご提言は各地の仏教者たちに大きな影響を与えている<sup>1</sup>。

## (2) 筆者の学問の歩み

筆者が日本に留学したのは20年前のことである。留学中は多くの皆様のおかげで有意義な研究生を送ることができ、その友誼は現在も続いている。このたび、『モンゴルにおける浄土思想』（法蔵館、2016年）を出版することができたのも、関係各位のおかげである。心より厚くお礼を申しあげたい。

筆者は、1993年10月、日本の優れた仏教研究の方法論を探求するために来日した。それ以前は中国北京市にあるモンゴル仏教の大寺院雍和宮で12年間、モンゴル仏教・チベット仏教・中国仏教などを勉強した。その間、中国蔵語系高級仏学院（中国チベット仏教大学）を卒業し、雍和宮で後継者を育成するための教師を勤め、住持の通訳なども勤めてきた。雍和宮は、北京で最大の仏教寺院であるため、参拝や観光のために訪れる人が毎日平均三千人を超える。訪れる人の中には日本人もいればアメリカ人もいる。そのため私はどうしても日本語か英語のどちらか一つを身に付けたいと考えた。そうしたところ、台湾大学の葉阿月教授の推薦を受け、横浜善光寺の留学僧育英会（黒田武志理事長）の奨学金を頂戴することができたため、愛知学院大学への留学が実現した。

来日して最初は、愛知学院大学の下宿グリーンハウスに3か月間、住んだ。その時、せっかく日本に留学したのだから、日本仏教の寺院に居住しながら、大学の研究と寺院の修行をしたいと考え、先輩の釈智観師に相談して、名古屋市天白区にある、相生徳林寺にお世話になることになった。こうして徳林寺で本格的に座禅をし、経を誦する修行などを始めた。住職の高岡秀暢師は、私のためにインド仏教史に関する研究書を拡大コピーして教えてくださった。徳林寺の信者伊藤美智子（故人）様が、私に日常の日本語を教えてくださいました。

このように、寺院での勉強と大学での勉強との両方に励んだ筆者は、1995年10月に愛知学院大学大学院文学研究科修士課程に合格し、前田恵學教授の指導のもと、「中国・日本・チベットとモンゴルの阿弥陀仏の比較研究」と題する修士論文によって、修士号を取得した。

修士課程の2年間は、国際ロータリー米山記念奨学会の奨学生になり、大須ロータリークラブのお世話になった。甚目寺観音の岡部快晃（故人）師のご紹介で、大須観音の岡部快圓貫首が筆者のアドバイザーとなってくださり、その後も岡部貫首からさまざまな面でお世話になった。

また、台湾の林江富美先生にも、長年にわたって物心両面にわたるご援助をいただいた。駒沢女子大学前学長の東隆眞先生にも、とてもお世話になり、先生のご推薦で、東京成願寺の「小笹会」の奨学金をいただくことができた。その際、「小笹会」事務局長の田中達実先

生は、私のためにわざわざ名古屋まで面接に来てくださった。先生方のおかげで、私は修士論文をまとめることができ、さらに博士後期課程に進学できた。

博士後期課程で筆者は引き続き前田先生のご指導のもと、主にモンゴル仏教について研究した。日本に留学して一番成し遂げたかったのは、日本語でモンゴル仏教について論文をまとめ、日本に記念として残すことだった。モンゴル仏教を日本に紹介するために、仏教関係のさまざまな学会で研究発表をした。さらに前田先生のもとで、モンゴル仏教以外の、原始仏教や現代仏教の存在形態やパーリ語などの勉強にも取り組んだのである。

### (3) 中国社会科学院訪日文化交流団

前田惠學先生は、2002年から数度にわたって中国社会科学院世界宗教研究所の研究者を日本に招聘された。

同年10月には先生のご尽力で同朋大学仏教文化研究所と愛知県仏教会の後援を得て「中国社会科学院訪日文化交流団」を結成して訪日することができた。この交流団は、中国社会科学院世界宗教研究所所長の卓新平様を団長として、同研究所から4人、雍和宮から4人、中国蔵語系高級仏学院から1人が参加した。

この訪日の際、同研究所教授の王志遠博士が同朋大学で「中国仏教の回顧と展望」と題して講演され、その講演記録が『同朋大学仏教文化研究所紀要』第23号（2003年3月）に掲載された。同研究所の何勤松博士は愛知学院大学で「禅意と書道芸術」と題する講演を行い、中国蔵語系高級仏学院の曹志強副院長（学長）は、真言宗智山派別格本山の大須観音宝生院で、「チベット仏教」と題して講演した。

さらに、「交流団」は、名古屋の日泰寺で日本の皆様と交流し、浄土宗大本山である光明寺、真宗大谷派本山東本願寺や前田速念寺などでも交流を行った。「交流団」の文化交流の活動内容は、『中日新聞』や『中外日報』、同朋大学や愛知学院大学の学内誌などにも掲載され報じられた。前田先生の熱情的なご招待をいただいた訪日団は、先生の「慈悲喜捨」の精神の発露である菩薩行に感動し、心からの敬意を表し感謝した。

### (4) 前田先生のご指導

筆者は大学院での日々の研究活動のみならず、前田先生について各地に同行し、さまざまな仏教講座や講演会などにも参加して、先生のご指導をいただいた。先生は、いつも私たち院生に、講義や講座などの内容を録音・記録・整理しておくことはとても大切なことであり、将来きっと役に立つとご指導くださった。そして、次のようなお話をされた。

釈尊は、49年にわたって説法され、仏弟子たちは、釈尊の説法されたことを説法のとおり暗記した。アーナンダをはじめ仏弟子が記憶した仏の教えが、世界中に聖なる教えとして貢献し、今に伝わっている。釈尊が説法された教えは、「如是我聞」、すなわち「私はこの

ように釈尊より法を聞きました」という言葉から始まる。しかし、現代の私たちの記憶力は弱くなっているから、記憶力に頼る代わりに、電子録音などを利用して録音するのも、一つの方法である、と。

筆者が前田先生から教わった現代仏教を研究する方法は、文献に注目し、重視することと、現地調査を行うこと、そしてその二つを両立させることが大切で、それにより仏教の真実のありさまを理解することができるというものであった。先生は、高僧大徳の「講経説法」と民衆の信仰の現状を記録しながら、仏教の「博・大・精・深」である智慧と悟りの世界を自ら体得し、解脱し、涅槃到達するには、「教義仏教」(Doctrinal Buddhism)と「民衆仏教」(Popular Buddhism)の働きが不可欠であると言われた。そして、これを実現するために、先生はスリランカや東南アジアの上座部仏教の修行僧や在家信徒に関する現地調査を何度も行われた。先生のような「仏法と世間法」に精通した高僧である学者は「甚為稀有」であろう。

#### (5) 前田先生による学会の設立と海外研究者の招聘

前田先生は仏教学の学術的な場の創設にも積極的に努力された。1954年には先生が東海地域の印度学仏教学の研究者に呼びかけ、「東海印度学仏教学会」を創設された。先生を中心とするスリランカにおける現地調査や共同研究を契機として、上座仏教およびパーリ学に関心を持つ研究者が、1986年に日本全国の学会として「パーリ学仏教文化学会」を組織した。前田先生はその初代会長となり、その発展に努められた。

また、この「パーリ学仏教文化学会」では「前田基金」が設置され、現地調査と海外の外国人研究者の招聘に努めている。そのおかげで中国社会科学院世界宗教研究所の鄭筱筠研究員は、2度にわたり日本に招聘された。パーリ学仏教文化学会の学術大会に参加し、1回目は「中国雲南省上座仏教の民族特徴」、2回目は「中国南伝仏教信仰地区澆水節の地域の特徴」と題として研究発表し、『パーリ学仏教文化学研究』第21号(2007年)と第22号(2008年)にその研究成果を公表した。

筆者も4回にわたって同学術大会で研究発表をする機会をいただいた。題目は①「文化大革命後のモンゴル地区仏教の様態--北京市雍和宮と承德市普寧寺を中心にして」(『パーリ学仏教文化学研究』第16号、2003年)、②「モンゴル地域の浄土思想」(同第17号、2004年)、③「モンゴル地域の仏教寺院の朝課研究」(同第20号、2006年)で、さらに2009年5月に高野大学で開催された第23回パーリ学仏教文化学会の学術大会では、④「雲南省の仏教様態」と題する研究発表を行った。

2003年11月、パーリ学仏教文化学会と東海印度学仏教学会(当時両会は前田先生が会長を兼任)は、北京仏教居士林の夏法聖理事長を日本に招聘した。その際、北京市宗教局の季文淵副局長が同行している。夏法聖理事長は訪日に際して同朋大学で「中国の居士と居士林」、

「禪淨双修と人間仏教--打禪七と念仏打七」、「浄土念仏と臨終に関して」と題して3回にわたって講演している。その内容は『中外日報』（2003年11月27日号）と『中日新聞』（2003年12月7日号）に掲載され、また「現代中国的居士仏教」と題して『同朋大学仏教文化研究所紀要』第24号（2004年3月）に掲載された。夏法聖理事長はさらに『前田惠學集第七卷 命終る時ほか』（山喜房仏書林、2007年）の第3章に「現代中国の居士仏教と念仏信仰」と題する論考を寄稿した。

前田先生は、韓国仏教と非常に特別な関係があった。先生の奥様の前田龍様は49歳から韓国語をマスターし、翻訳された『中日韓文浄土読誦経典』は法藏館で1984年に出版された。また、浄土真宗の『歎異抄』などを韓国語に翻訳され、韓国で紹介されている。なお、竜様は、18年間にわたって病身の先生のご母堂を介護された。これは実の菩薩でなければ一日もできなかったことではないかと思う。真の発菩提心があってこそその18年にわたる介護であった。このような偉大な奥様が隣においでになったから、前田先生は、聖なる仕事に邁進できたのではないかと思う。こうしたことは『前田惠學集第七卷 命終る時ほか』第1章の「追録一、ある老人の生き様」、「追録二、母のこと一看取り一八年」に詳しく記されている。

## 2 前田惠學先生の仏教思想と研究

### (1) 仏教とは何か

前田惠學先生が常に考えられていたことは、「仏教とは何か」という究極的な問題であった。先生が体得された結論は『前田惠學集第二卷 仏教とは何か、仏教学いかにあるべきか』（山喜房仏書林、2003年）に以下のように述べられている。

仏教とは、釈尊を開祖とし、涅槃ないし悟りと救いを、最高究極の価値ないし目的として、その実現を目ざし、世界の諸地域に展開している文化の総合的な体系である<sup>3</sup>。

また、先生は、現代社会の諸問題についても『前田惠學集第六卷 核の時代における平和と共生ほか』（山喜房仏書林、2005年）に詳しく論究された。同書まえがき冒頭には、次のようにある。

核の抑止力は、平和実現のすべにならない。平和の要諦は、「怨みを棄てる」ことにある。他のいかなる理論をもってしても、平和の実現は不可能である。その上で、共生・知足・相互畏敬の三か条を実現することである。これは、その気さえ興せば、誰にでもできる。仏教はそれを説く。

さらに『前田惠学集第一巻 釈尊をいかに観るか』（山喜房仏書林、2003年）においては、釈尊は縁起という真理を悟ったから「仏陀」といわれ、そして、初めて「法輪」を五比丘に説法されたから「如来」といわれるようになったと述べられた<sup>4</sup>。先生の考えでは、原始仏教の時代は、多くの仏弟子が悟りを開いたが、阿羅漢にはなったとはいえ、利他行をしなかったので、成仏できず、後継者が確立しなかったのである。

利他行についての前田先生の考え方は次の通りである。仏の教えは、自利利他円満してはじめて完成する。命終わって浄土に生まれる往生浄土の往相回向は、多くは自利の境界である。これに満足して終りできない。浄土からこの世に帰って利益衆生する乗願再来の還相回向があってはじめて、利他が成就する。これが「甦り」である。そこに、菩薩の行がある。この理を知った上に、今日、今の念仏の意味がある<sup>5</sup>。

前田先生は、浄土真宗の修行の有り様についても深く分析された。親鸞聖人の教えは「還相回向」であるとし、修行者は、普賢の菩薩行をしなければならない、すなわち、修行道に入り、命が続く限り粘り強く利益衆生の菩薩行をすることが必要である。これこそが浄土真宗の最高の修行方法であると論及している。

また、親鸞聖人の『讚阿弥陀仏偈和讃』第十五首に「安楽無量の大菩薩、一生補処にいたるなり、普賢の徳に帰してこそ、穢国にかならず化するなれ」とあることをふまえ、親鸞聖人の普賢菩薩への信仰について、安楽浄土にいる無数の大菩薩たちはすでに仏に等しい方々で、浄土を一生補処の場とされており、穢れた娑婆世界に還り、きっと普賢菩薩のように働いてくださると前田先生は述べられた。親鸞聖人の普賢菩薩への傾倒については、若年期の比叡山における修行が甦っていると思われる。修行の場であったとされる常行堂の隣には法華堂があって、普賢菩薩が安置されていた。この二堂は渡り廊下でつながれ、その形から「にない堂」と言われる<sup>6</sup>。

ところで、『釈迦牟尼仏賛』（skabs gsum pha bshugs so）には、以下のように説かれている。

【原文】

ston pa h̄jig rten khams su byon pa dañ// bstan pa ñi ḥod śin tu gsal ba dañ// bstan  
dsin bu slon śin tu mthun pa yi// bstan pa yun rin gnas paḥi bkra śis śog//<sup>7</sup>

【漢訳】

一切諸仏興於世、聖教顕明如日光、持教相和如兄弟、願施正教恒吉祥

【和訳】

一切の諸々の仏は、世を興し、聖なる教えは日光の如く明らかである。仏教に帰依している人は、兄弟の如く相和し、正しい教えが常に吉祥を施すことを願う。

諸仏・諸菩薩はそれぞれの「本願」と「誓願」を立て、人々を救済し、人々を護り、人々の願いを円満させる。衆生はさまざまで、それぞれにそれぞれの願いがある。それゆえ、モンゴル仏教寺院では、仏教の「対機説法」の方便により、病気の原因によって治療する方法をそれぞれに合わせて変えるように、人々の願いに応じて法会を執り行っている。

モンゴル仏教の修行法の一つの特徴は、母なる一切衆生を聖なる幸福田であると考えるところにある。一切衆生を今生の父母、兄弟、姉妹であるかのように愛し、互いに助け合わなければならない。こうすることによって、成仏の条件の一つである「福德資糧」を得る修行の要因になると信じられている。

したがって、この意味から、モンゴルの母親にとって、自分の子が僧になることは、「金の塔」(altan suburga) を造ることと同等であるとされる。僧になった子が、母なる一切衆生に利益を施すことは、母親にとって最高の光栄であるとされる。

このように考えれば、父親と母親がいなければ、人の今日の人生は成立しない。それぞれの家族の父親と母親は、それぞれの子供たちを無私の慈悲の心で養育する。父親と母親の愛は世界で最も純粋な愛であり、真実であることは言うまでもない。したがって、仏教の教えでは過去、現在、未来のすべての衆生を今日の父親と母親のおかげであると考えられる。父親と母親への「知恩、念恩、報恩、慈愛、大悲、増上意樂(広大的な責任感)、発菩提心」を実行しなければならない。「一切衆生是我的幸福田」、すなわち、一切の衆生は私の福德の依りどころである。父親と母親をはじめとする「各行各业」、各分野や各領域の人々は、みな私のために心と物質によってつとめを果たしている。しかし、社会の人々に依らないでは、私はこの世界で一日も生きることができない。仏教の教えは「衆縁和合、善待衆生、念恩、感恩、報恩」、人間としての理念をもって生活を送ることを説くのである。

また、『上師供養儀軌』(bla ma mchod paḥi cho ga bshugs so) の中説には次のような記述がある。

#### 【原文】

愛執自己衰損門、愛執諸母功德本、故以自他等換行、作修心要祈加持、  
至尊上師大悲者、慈母有情罪障苦、今於我身令成熟、盡我樂善捨他、  
衆生具樂祈加持<sup>8</sup>

#### 【和訳】

自己を愛執することは、自己を衰損する原因である。諸々の母親を愛執することは、すべての功德の原点である。その故に自他を切り換えて修行し、心を込めて修行することを祈り加持し奉る。

至尊である上師は、大悲者であり、慈母である有情の罪障苦を、今はすべて我が身に成熟せしめ、私の樂善をことごとく慈母である有情に与え、すべての衆生の幸福の円満

を祈り加持し奉る。

中村薫先生の研究によれば、『華嚴経』では信は仏道の第一歩であり、初発心こそが解脱道の根源であると説くという<sup>9</sup>。また、親鸞の『善導和讃』第21首「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり、自然はすなわち報土なり、証大涅槃うたがわず」によって、念仏の信は、願より生じるから、成仏は自然であるという。つまり、信は願を背景にして初めて信を得るともいえる。そのため、信は願から生じることからすれば、初発心と願（本願）が同質のものでなくてはならない。

仏教の教えからすれば、一切の衆生は、仏教に寄りすがる。まるで生まれたばかりの赤子が、母親に護られているようなものである。心を込めて正確に仏教を学ぶことができるならば、それは勝れた真実の功德であり、また仏・法・僧の三宝の教えの真理にも通じる。仏と菩薩は大慈大悲をもって一切衆生に対して加威力を施し、智慧を与え、福德を与える。それだけでなく、仏や菩薩の智慧と福德は無限であり、有縁の衆生を煩惱から解放し、最終的に成仏することができると思わせる。

前田先生は、平和を熱愛し、暴力に反対し、現代社会に公認されている世界仏教の指導者の一人であった。中日仏教のためだけでなく、日本と東南アジア仏教をはじめ世界の仏教者の交流に大いに貢献された。もし、世の人が、前田先生のように「自未得度先度他」の利他救済の心を持てば、菩薩行によって社会へ貢献し、心と体が一緒になって働き、この世界は、平和になり、人々は幸せに暮らせるのではないだろうか。

先生は、「仏学を修行するのは『取る』ではなく、人々にもものを『与える』のです。もし、利他行をしなければ、仏道の成就是有り得ない」と教えてくださったのである。

## (2) 原始仏教研究

さて、前田恵學先生は、特に原始仏教について優れた研究業績をあげられた。仏教の研究は、原始仏教の考察、すなわち、釈迦牟尼仏の「初転法輪」の内容を研究することが重要である。先生は、日本財団法人仏教伝道協会から2005年に仏教伝道文化賞功労賞を受賞された際、仏教は一宗派の教えではないと主張された。各自の宗派の開祖の崇拜に陥り、釈尊を無視し、釈尊の教理を忘れてしまう現状が散見されるが、これでは、仏教であるとは言えない。仏教は、寛容を優先する理性的な教えであり、慈悲や一切衆生の平等を説く宗教である。もし、宗派の見方や民族の見方を優先し、それぞれの国の見方を優先するのが仏教であるとするならば、これは根本的に仏教の原始的な思想と永遠の真理から遠く離れていると言わざるを得ない。

前田先生は、釈尊にはじまる仏教のすがたを大切にされながら、原始仏教を考察し、現代仏教の実態を調査され、今後の仏教の発展と展望の方法論を教えてくださいました。釈尊は、七



歳の子どもにも法を教え、悟りを開かせた。私たちは、学問に精進し、単に理解することだけにとどまらず、多くの人にしっかりと仏法を伝えていく必要があり、それこそが正しい仏教研究者の努めであるということを先生から教わった。

もっとも、釈尊にはじまる仏教の実態を、過去から現在までその全容を明らかにすることは、至難の業である。『前田惠學集』全六巻・別巻・附巻は、その窓口を初めて開いた画期的な労作群であり、これを手にする人は、至るところに独創的な卓見に接し、瞠目の思いを抱くであろう。これから仏教研究に取り組もうとされる人にとって、この『前田惠學集』は必読である。

### (3) 東アジア仏教研究

東アジア地域に広がる仏教の中で、東南アジア仏教は古来、南伝仏教と呼ばれ、上座部仏教の性格を強く持っている。前田惠學先生は、在家仏教の研究をするには、実際に現地へ赴いた学術調査が非常に重要であると考えられていた。先々は生涯を通じてそうした現地調査に取り組み、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、タイ、シンガポール、インドネシアなどに何度も足を運ばれ、国際的かつ学際的な共同研究を行われた。

その研究成果の大きな一つである前田惠學編『現代スリランカの上座仏教』（山喜房仏書林、1986年）は、スリランカにおける現代仏教の実態を注視し、その視点を持って過去から現在に至る、その生きた歴史的な全容をくまなく明らかにされた。そうした方法論の確立も含め、同書は研究史上、未曾有の金字塔を打ち建てたと評価されている。なお、現地調査の研究成果と方法論は、『前田惠學集』の第三巻、第四巻および別巻二にあらためて収められた。

前田先生は、中国を中心として、北伝仏教の研究にも多大な成果を挙げられた。先生が現地調査に赴かれた先は、中国はもちろん、朝鮮半島、台湾地域、モンゴル地域に及んでいる。1999年7月に前田先生が中国に赴かれた時には筆者も随行した。その際には中国仏教協会副会長の浄慧法師、北京仏教居士林の夏法聖理事長、北京雍和宮住職の胡雪峰法師や、北京広化寺怡学方丈などを歴訪し、仏教交流を行った。中国北方仏教寺院や居士仏教の浄土信仰の実態に関する現地調査が蓄積され、その研究成果の一部は『前田惠學集』第二巻に収録された「中国仏教を見直して全仏教を肯定する」、「北京・河北に「念仏打七」を訪ねて」など、また同第七巻に収録された「現代中国の居士仏教—根強い念仏の信仰—」などから学ぶことができる。

### おわりに

前田惠學先生は次のようにも述べられている。

人間が流転輪廻していく先の世界は、人間がこの世で行なった行為すなわち業によって決定せられるという。業の問題を除いて、輪廻を語ることはできない<sup>10</sup>。

すなわち、自分の行為の結果は、自分で受けるのである。そして、六道輪廻の世界には、生死の苦があり、迷いがある。これは不変の事実である。六道は、善因は善果を受け、悪因は悪果を受けるといふ、平等の世界である。仏教が説く「業と輪廻」を明らかに理解することによって、客観的に因果に関する姿勢を正確に立てることができる。因果の定律は、仏教が東南アジア地域に影響した最大の理念である。仏教の最も根本的な目的は、輪廻を解脱することであり、それは生死の問題を明らかにするものであるというのが前田先生の考え方である。

輪廻の苦を解脱した人は、仏教では「阿羅漢」といわれる。「阿羅漢」とは、次の四つの条件を満たしている聖なる人である。一つ目は、「所作已弁」、娑婆の縁を果たしている。二つ目は、「梵行已立」、清浄なる修行を確立している。三つ目は、「生死已了」、再び輪廻することがない。四つ目は、「不受後有」、再び娑婆世界に生まれることがない。これが、阿羅漢の条件であるとされる。

こうして僧侶は、「学仏行仏」の方針によって、一切衆生を煩惱から解脱させなければならぬという、「慈悲喜捨」の大願大行の菩薩行を実践するのである。

筆者はこれからも、前田先生の「慈悲喜捨」の菩薩行を受け継ぎ、研究生活に精進していきたいとあらためて決意する次第である。

#### 注

- 1 『前田惠學集』全六卷（山喜房仏書林）著者紹介参照。
- 2 『前田惠學集第七卷 命終る時 ほか』（山喜房仏書林、2007年）40-60頁。
- 3 『前田惠學集第二卷 仏教とは何か、仏教学いかにあるべきか』（山喜房仏書林、2003年）44頁。
- 4 『前田惠學集第一卷 釈尊をいかに観るか』（山喜房仏書林、2003年）37頁・44頁など。
- 5 参考『前田惠學集第七卷 命終る時 ほか』605-616頁「最終章 甦りのこと—浄土の教えの窮まるるところ」。
- 6 『前田惠學集第七卷 命終る時 ほか』611-612頁。
- 7 『藏漢蒙對照佛教日誦』（中國民族出版社、2009年）117-118頁。
- 8 『藏漢蒙對照佛教日誦』189-190頁。
- 9 中村薫『中国華嚴浄土思想の研究』（法藏館、2001年）9-10頁。
- 10 『前田惠學集第七卷 命終る時 ほか』176頁。